磐梯山噴火と住民の行動

廣 井 脩

Eruption of Mt. Bandai and Behaviors of Sufferers

Osamu HIROI

I. はじめに

明治20年代は、磐梯山噴火、濃尾地震、三陸地震津波などの巨大災害が次々に発生し、近代の災害史において特筆すべき10年間であった。

本論で扱う磐梯山噴火は、これらの災害の嚆矢となったものであるが、死者数は461人とも477人ともいわれ、濃尾地震の7,200人や三陸地震津波の27,000人にくらべて桁ちがいに小さい。しかしこの噴火は当時、明治5年の浜田地震(死者552人)とならんで、近代日本が経験した最大級の災害だったため、世間の耳目はこの噴火に集中し、少なからずの調査報告や踏査録・見聞録を残すことになった。これらのうち学術的なものは、「官報1555号」(明治21年9月27日)に掲載された理科大学教授関谷清景らの「磐梯山 破裂実況取調報告」、また民間人の踏査録・見聞録としては「磐梯山噴火実況」(元朝院文書)、「会津磐梯山噴火之由来」(吉田丑蔵)、「会津磐梯山噴火由来」(遠藤重吉)、「磐梯山破裂実見録」(高橋鉄牛)などがある²⁾。

この小論では、これらの記録を参照して、明治21年の磐梯山噴火の被害状況・罹災者の心理と行動・噴火時の新聞報道などに関し、その概要を簡単に述べていきたい。

II. 前兆現象と噴火の状況

福島県岩代国の群峰磐梯山の一つの小磐梯山が破裂したのは、明治21(1888)年7月15日(旧暦6月7日)午前7時45分のことであった。

この年は梅雨期が長く続き、非常に不順な気候だったが、6月下旬頃から磐梯山はときどき鳴号を繰り返し、その頻度は日に日に増加していった。そのため、最初は意に介さなかった人々もしだいに不安になり、磐梯山麓にあった^{ひばら}松原村の^{おおさわ}雄子沢・細野・小川・秋元原などの住民は、そのうち天変地異があるにちがいないと口々に語り合うようになった。7月に入って、8・9・10日はともに午前11時頃地震があり、13日午後3時頃にも地震が起こった。また14日午前8時頃には、とくにはなはだしい鳴動があった。磐梯山中腹にあった上の湯や下の湯の浴客は、この鳴動を大いに恐れ、仕度をととのえ家路を指して逃げ帰った者も多かったという³⁾。

噴火当日の7月15日は、一点の雲もない快晴となり、磐梯山近傍の農夫たちは朝から畑仕事に余念がなかったが、午前7時頃から山の方でゴーゴーという山鳴りが聞こえ、7時半過ぎにはすこぶる強い地震が発生した。この地震は止むどころかますます強くなって、最初は天をあおぎ見る程度だった住民たちはやがて歩行困難となり、ある者は必死に竹藪に這い込み、ある者はなすすべもなく喚き叫ぶばかりだった。しかし鳴動はいっそう強くなり、ついに午前7時45分、小磐梯が破裂したのである。そのありさまは、「^{みだか}恰モ百万ノ迅雷ガ地上ニ落ち来ル如キ響ト共ニ、火焰ヲ噴出シテ最モ恐シキ墨煙、水蒸氣ヲ帯ビ天空遙カニ

* 東京大学新聞研究所 Institute of Journalism and Communication Studies, the University of Tokyo

のほ
沖ルト見エシガ此時石塊ノ幾百トナク
飛び揚カリテ、其狀天地ニ白光ノ玉ヲ
付タル太キ一本ノ煙柱ヲ立テタル如ク
ニテ、玉ハ忽チ産卵シ煙ハ四方ヘ拉リ
テ灰、砂ヲ雨フラス事夥タシク・・・」⁴⁾と
いうすさまじい状況であった。

III. 噴火による被害

この小磐梯の破裂と同時に、巨大な岩石が四方に飛び散って大木を倒し、また猛烈な爆風と大量の泥流が発生した。すなわち、まず破裂のさいに生じた爆風は東南に吹き荒れ、赤埴山の半腹を通して山鹿の渋谷・白木城・見禰の人家を吹き飛ばした。これら部落の罹災者には裸体の者も少なくなかったが、これは爆風で衣服が吹き取られたためであった。また泥流は、急激なスピードで小磐梯の北を下り落ち、長瀬川の上流に向かって桧原地方に拡がり、秋元原・細野・雄子沢の各部落を埋没し、その一部は長瀬川を下って川上温泉を埋め、それから長坂部落を通して樋之口で止まった。もう一つ、小磐梯の東に向かった泥流もあり、こちらは枇杷沢を下って見禰部落に向かったのである。このほか、噴火にともなう降灰は東南部に多く、浅いところで1寸、深いところで1尺に及んだ。この灰は火気と水分をとともに含んでいたため、罹災者の顔面はたいいてい焦げ脹れており、また灰が皮膚に付着してなかなか取れなかったという⁵⁾。

かくして、この噴火の被害は、桧原・磐瀬・若宮・蚕養・三郷の諸村に及び、これらを総計した家屋被害は潰家47戸・埋没45戸、死傷者は死亡477人・負傷47人に達し、このほか、斃死牛馬57頭、埋没して原形を失った田が24町、畑が120町などにのぼった。このうち、とくに被害が大きかったのはまず磐瀬村長坂で総数28戸のうち泥流による死亡者が98人、負傷者が36人を数え、一家内残らず埋死した世帯も5戸にのぼった。また、川上温泉にあった3戸はすべて泥の下に埋まり、50人ほどいた浴客は全員死亡。さらに、桧原村の細野・雄子沢両部落はことごとく埋没し、秋元原部落もすべて埋没して、当時他出していた12人をのぞき60人が死亡という惨状になった⁶⁾。

IV. 罹災者の避難

次に、噴火時の罹災者の行動をみると、噴火とそれに続く大石の飛散・泥流・爆風などに遭遇して、ほとんどすべての罹災者は、当然ながらまず「緊急避難行動」をとった。すなわち、「(あたかも鉄道の走るが如き泥流を)見るより皆々磐梯抜けたりやと、命計は助りたしと泣きす

第1図 磐梯山噴火略報 (東京大学新聞研究所蔵瓦版)

第2図 磐梯山近傍の地図 (高橋鉄牛『磐梯山破裂実見録』より)

がるも有、又親子^{みさかい}の見界もなく赤子ヲすて、我も我もと遁^{にげ}去りける。又馬を助けたしと牛馬を引き出し、南をさして走り行く」¹⁷⁾ という光景が、いたるところで現出したのであった。しかし大量に降り注ぐ濃厚な灰砂のため、「最早自宅より一丁程も遁さる内、(灰)が降り来たって一面闇夜より未だ暗し」という状況になり、たちまち人々の退路は絶たれてしまった¹⁸⁾。

この事実は別の文献にも示されており、そこには次のように書かれている。「(噴火の)瞬間ニシテ天地ハ晦冥ト変シ呼吸モ出来ス、眼モ明ケズ只タ恐怖ヲ以テ覆ハレ、驚駭ニ包マレ、足ニ任セテ進マントスルモ進ム事能ハス、恰モトンネルノ中央ニ彷徨フテ叫喚焦熱ノ地下ニ陥テ行ク有様ナレバ、妻ハ大石ニ打タレテ忽チ奈落ノ底ニ淪モ夫ハ之レヲ顧ミルノ暇ハナク、子ハ川ノ中ニ吹落サルルモ親ハ全ク愛情ヲ失フテ狂フガ如クニテ、或ハ生キナガラ泥土ノ下ニ埋メラレ、或ハ首ノミ飛ンデ樹ノ枝ニ掛レアリ、数百ノ人命数分ノ間ニ絶ヒ果テテ、悲ムヘク痛ムベキノ極度ニ達シタルハ、中々筆ノ及ブ可クモアラズ」¹⁹⁾。

こうした灰砂は断続的に降り注いで、北は土湯沢、南は猪苗代町、東は田村郡三春にまで及んだ。罹災者はこの降灰に退路を阻まれながら、生きた心地もなく避難していったのである。その様子は、「(灰砂の降る)時は万神を祈り、子に離れ、親に分れしも是非なしと思イ、只我助かりたしと神仏を祈り、南無阿弥陀仏をとえぬ者はなかりける。然るに少シ砂晴れてあく吹去り、天を明かになるべしと万民よろこび居内に、又もや砂降来り、其有様を見て逆も助かる様無之と思へけるは、残念なりける次第とてかがみ居内、天晴て元の晴天となり、然ルに我始めいきたる心にて南をさして遁け行きたり」¹⁰⁾と描写されている。

V. 噴火体験談といくつかのエピソード

次にあげるのは、磐瀬村渋谷部落に住む穴沢甚四郎(当時30歳)なる人の体験談である。

噴火当日は朝から好天気だったので、かれは家族5人とともに近所の田で草採りをしていた。ところが午前8時と覚しき頃、激しい地震が都合5回も起こり、次いで、天地が崩れるかと思うような物音とともに大噴火が発生した。はじめは小石が降り、次いで灰が降ってあたりは真っ暗になったが、およそ1時間ばかりで空は曇れわたり、地震も静まった。

噴火前の激しい地震が起こるやいなや、かれは家族5人とともに田の南方にあった土手に登って地上に伏せていたが、震動がいよいよ激しくなってきたので、そこを逃げ出して長瀬川の方へと走っていった。かれは長瀬川の中で倒れてしまったが、そのときはすでに噴火が発生して一面の暗黒となっており、たまたま飛んできた噴石に胸を打たれて負傷してしまった。けれども、川の中に長くいると出水があるかもしれないと思い、かれは痛さを忍んでやっと堤に這いあがり、そのままそこに伏せていた。そのうち空が晴れてきたので、やっとわが身を顧みると、いつのまにか全身に泥土がこびりついていた。

かれが恐る恐る家に帰ると、部落には3尺あまりも灰が積っており、わずかに17戸の小村のうち9戸は噴火の爆風で潰屋となり、あたりに6歳と8歳の女子や60くらいの男が、川中には娘が、そして倒れた桑樹の下にも男が死んでいた。そのほかの村人は東方に避難して助かったようだったので、かれは家族を引き連れて小田村へと避難したが、ここはわずか1寸ほど灰が積っているだけだったという¹¹⁾。

なお、大災害には常にあることだが、磐梯山噴火においても、悲惨な死を遂げた人々の哀話や、逆に奇跡的に命を助かった人たちの生還談が残っている。以下、冒頭にあげた文献の中から、そうしたエピソードをいくつかあげておく。

○磐瀬村長坂では、79歳の老婆が泥流に巻き込まれたが、一本の木にしがみついてやっと助かった。しかし、あまり一生懸命に木にしがみついたため、なかなかその手が取れなかったという。

○同村長坂の渡辺つる(49歳)は、4人の家族がたまたま外出しており1人で留守居していたが、噴火直後、同村の後藤フク(64歳)と一緒に家を飛び出し、竹藪に駆け込んだために助かった。しかし、家族のうち壮健の子供3人は皆死亡し、夫の生死は不明になった。一方、後藤フクの家族は都合11人。このうち

- 身体の丈夫な9人は遠く逃げのびてかえって命を失ない、老い先の短い彼女と11歳の孫だけが命を長らえた。
- 松原村秋元原部落では噴火当日、租税額を決めるために田畑測量を実施しており、そこに泥流が押し寄せたため、住民のほとんどが犠牲になった¹²⁾。しかし生存者も何名もあり、たとえば、ある娘はその日の朝、馬を引いて猪苗代町へ炭売りに出かけたため、20人の家族のうちただ1人だけ助かったという。
- 松原村小野川部落では、最初この噴火を見て、磐梯から何か魔物が出てきたかと思ひ、村中一同が鉄砲を揃え磐梯に向かって撃ちたてた。しかしついに泥が押し寄せ、人々は仰天していっせいに遁走した。
- 若宮村明家部落の一の瀬伝吉という人の娘は、朝早く畑仕事に出かけていたが、噴火の大音響に驚き逃げ帰ろうとしたところ、後の方から泥土が押し寄せてきた。しかし運良く、泥土の上に乗せられて20町ほど下で止まったので、命に別状がなかった。
- 同じく明家の女性は、噴火の3日後に泥から首だけ出した姿で発見されたが、病院に送って治療した結果、もとの身体になって大いに喜んだということである¹³⁾。

第3図 磐梯山噴火之顛末（東京大学新聞研究所蔵瓦版、口絵参照）

VI. 噴火とパニック・流言

ところで、罹災者の行動に触れた文献の中には、先に引用した「親子の眼界もなく赤子ヲすて、我も我もと遁去りける」という記述のほかにも、「自分等銘々思ひ思ひに諸方に逃げ候へし」とか「取ル物モ取り敢ズ其儘逃グ駈ケ出シ」とか「皆々遁去りて一人も居ざりける」など、噴火に遭遇した住民が恐怖にかられ、親子兄弟を顧みずひたすら避難する様子が描写されている¹⁴⁾。これは、無秩序な避難、あるいは統制のとれない社会的混乱としての「パニック」を意味しており、噴火時にはこうした逃走行動が各地でみられたと推測される。ただし、噴火が人口の少ない村落の付近で発生したため、こうした逃走行動が「群集なだれ」を生み出して圧死などの惨事を招いた形跡はない。

過去の噴火災害でもこのような無秩序な避難行動が発生しており、とくに避難の遅れが決定的な意味をもっている離島噴火の場合には、住民の脱出欲求が最高度に達するため、パニックの起こる可能性は小さくない。たとえば、『日本噴火志』（震災予防調査会）の天保6（1835）年「三宅島噴火」の項には、「村中よりも噴火すべきかと疑はれたる程にして甚だしく騒乱を極め、村民は諸道具飯米等を用意し船に乗りて逃出さんとしける」とあるが、これはその一例といえよう¹⁵⁾。

災害時のパニック発生条件を列举すると、①危険が突発的に起こること、②その場所から脱出しなければ助からないという認識を人々がもつこと、③脱出口があること、④しかしその脱出口が限られていることなどであり、これらの条件がすべて揃ったときにパニックが発生する¹⁶⁾。各種の災害をこの観点からみると、風水害は一部を除いて突発災害とはいえないので、①の条件を満足せず、また大地震は突発災害であるが、脆弱な建物の中にいるとか建物内で地震直後に火災が起こるという状況以外には、②の条件を満たすことが少ない。それゆえ、これらの災害では、一般に考えられているほどパニックは頻発しないというのが社会心理学の常識である。しかし噴火や津波のように、その危険が可視的で、かつA点からB点へといった一定の方向性をもつ突発災害の場合には、上述の条件をすべて満足することが多く、とりわけ離島噴火

の場合には④が決定的な意味をもつため、パニックが発生する可能性は決して否定できないといえよう。

磐梯山噴火における罹災者の行動に関し、もう一つ留意すべきなのは、流言蜚語が少なかったことであろう。少なくとも、冒頭にあげた文献類の中には、噴火後に流言が拡がったという記述はほとんどみあたらないのである。

災害流言は、住民の恐怖や不安など、強い感情的興奮を土台にして発生する。とくに大災害のさなか、またはふたたび災害の起こる恐れがある状況では、住民の恐怖や不安が昂進するため、「〇〇地方が全滅する」という破滅予告型の流言や、「全員ただちに避難せよ」という緊急避難を指示する流言がしばしば発生する。たとえば、大正3（1914）年の桜島噴火では、対岸の鹿児島市でさまざまな流言が拡がった。すなわち鹿児島市では、噴火にともなって大地震が発生したとき、「津波が来襲する」とか「毒ガスが発生した」という流言が頻発した。また、恐怖に襲われて多くの市民が一目散に城山へ避難したが、かれらがようやく落ち着いて、焚火をしながら露営の夢を結ぼうとしていたとき、「津波が襲って県庁付近にまで迫りつつある」という流言がふたたび拡がり、動揺した群衆は先を争って下山し、夜を徹して伊敷方面に避難していったという¹⁷⁾。このほか、最近の災害をみても、昭和61（1986）年の伊豆大島噴火では、「大島測候所が燃えた」、「元町で噴火が起こった」、「ヘリコプターが墜落した」など、さまざまな流言が発生し、またたく間に住民のあいだに拡がっていった¹⁸⁾。

災害時に流言が拡がることはきわめて多い。流言は災害につきものといっても過言ではなく、もちろん噴火の場合もそれがあてはまる。しかし、磐梯山噴火のさいは目立った流言は発生しなかった。これは何故だろうか。あるいは流言が拡がったにもかかわらず、文献から漏れてしまったという可能性もあるのでその解釈は容易でないが、おそらくもっとも大きな理由は、災害の継続時間が短かったこと、つまり最初の噴火から、大石の落下・爆風・泥流など壊滅的現象が終了するまでせいぜい1時間足らずだったことにあると思われる。噴火を覚知した住民は、互いにコミュニケーションする余裕がなく無我夢中で避難し、気がついたときにはもうすべてが終わっていた。流言が拡がるためには、コミュニケーション・ネットワークの存在とコミュニケーションのための時間が必要であるが、磐梯山噴火があまり突発的に起こり、短時間で終息してしまったため、流言の拡がる余地がなかったと考えるべきであろう。

VII. 噴火報道と義捐金の募集

この磐梯山噴火は、当時すでに近代的報道機関としての体裁をととのえていた新聞各紙によって、大々的に報道された。電報以外に通信手段がなかった（電話が開設されたのは明治23年）時代であるから、噴火の第1報は17日だったが、たとえば東京日々新聞の第1報は、「一昨日午後四時若松より或方へ達したる電報に同日午前八時磐梯山噴火磐瀬村の内凡そ五十六戸潰れたり噴火尚ほ止まずとありしよし」、また奥羽日々新聞では、「今十五日午前八時十五分本地磐梯山噴火す近村多分の被害なきも岩瀬村の内字ミネブン凡そ五六戸潰れ人畜の害あり員数不詳」となっている。

このあと、各紙は競って詳報を出し、7月20日から8月初めをピークとして、その後さみだれ式にほぼ9月末日頃まで記事が掲載されている。これらの中には、被害状況や行政の対応措置を伝えるストレート記事のほか、「噴火実見」（奥羽日々新聞）、「磐梯紀行」（読売新聞）などのルポルタージュも少なくない。

しかし注目すべきなのは、罹災者救援のための「義捐金」募集活動であろう。これは、報知新聞・毎日新聞・時事新報・東京朝日新聞など15の新聞社が義捐金を募集し、提供者の氏名を新聞紙上に掲載したものであり、7月21日にその最初の広告が各紙に載った。結局、9月までにこれら各紙が集めた義捐金の総額は6,378円にのぼり、これを福島県知事を通じて罹災者に分配したのである。

周知のように、昭和60（1985）年のメキシコ地震では、被災者の救助・救援にさいし活発なボランティア活動が行われた。欧米諸国では従来からボランティア活動が盛んであるが、日本における災害援助はこうした肉体的奉仕の形をとらず、むしろ被災者に義捐金を提供することが多い。

わたしの知る限りでは、新聞社が率先して災害の罹災者に義捐金を提供する習慣は、明治19年に発生した「ノルマントン号」事件（紀州大島沖で遭難した英国汽船ノルマントン号が、邦人乗客23名と水夫13名を見殺しにしたとして世論を沸かせた事件）のさいにはじめて確立したようで、磐梯山噴火以後にも、たとえば明治29年の三陸地震津波の1ヶ月後、博文館の『文芸倶楽部』が、森鷗外・尾崎紅葉・幸田露伴・樋口一葉など当代の人気作家88人を動員して、臨時増刊『津波義捐小説』を発行し、原稿料と販売利益の一部を災害地への義捐金にあてたケースがある。最近でも、昭和57（1982）年の長崎水害によって甚大な被害を受けた長崎市には23億円、58（1983）年の三宅島噴火における三宅村には10億円、そして61（1986）年の伊豆大島噴火における大島町には11億円の義捐金が全国から寄せられ、そのほか、衣類やインスタント食品など大量の義捐物資も送られている¹⁹⁾。このような災害救援の形態は、欧米諸国とかなり異なったものと思われるが、これも日本人の国民性の一つのあらわれかもしれない。

注

- 1) これらの災害の死者数は、すべて『理科年表』（東京天文台）による。
- 2) このうち、「磐梯山破裂実見録」（高橋鉄牛）を除いて、すべて山田（1988）に掲載されている。なお、「磐梯山破裂実見録」（高橋鉄牛）は、下鶴大輔先生にその存在を教えていただいた。
- 3) 元朝院文書「磐梯山噴火実況」（山田 1988, 103～104ページ）。なお、井上 靖（1961）には、これ以外の種々の前兆現象が取りあげられている。
- 4) 元朝院文書「磐梯山噴火実況」（山田 1988, 88ページ）。
- 5) 関谷清景・菊地 安「磐梯山破裂実況取調報告」（山田 1988, 60～62ページ）、元朝院文書「磐梯山噴火実況」（山田 1988, 93～94ページ）。
- 6) 元朝院文書「磐梯山噴火実況」（山田 1988, 95～96ページ）。
- 7) 遠藤重吉「会津磐梯山噴火由来」（山田 1988, 123ページ）。
- 8) 遠藤重吉「会津磐梯山噴火由来」（山田 1988, 123ページ）。
- 9) 元朝院文書「磐梯山噴火実況」（山田 1988, 89ページ）。
- 10) 遠藤重吉「会津磐梯山噴火由来」（山田 1988, 123ページ）。
- 11) 高橋鉄牛（1888）25～26ページ。
- 12) 井上 靖の小説「小磐梯」は、「地押調べ」というこの田畑測量のために出張してきた収税吏を主人公にしたものである。
- 13) これらのエピソードは、元朝院文書「磐梯山噴火実況」、遠藤重吉「会津磐梯山噴火由来」、吉田丑蔵「会津磐梯山噴火之由来」、高橋鉄牛「磐梯山破裂実見録」から引用した。
- 14) 関谷清景・菊地 安「磐梯山破裂実況取調報告」（山田 1988, 62ページ）、元朝院文書「磐梯山噴火実況」（山田 1988, 89ページ）、吉田丑蔵「会津磐梯山噴火之由来」（山田 1988, 112ページ）。
- 15) 震災予防調査会（1918）105ページ。
- 16) 廣井 脩（1987）192ページ。
- 17) 九州鉄道管理局（1914）72ページ。
- 18) 東京大学新聞研究所「災害と情報」研究班（1988）19ページ。
- 19) これらの災害における義捐金・義捐物資については、廣井 脩（1985）を参照。

文 献

- 井上 靖（1961）：「小磐梯」『新潮』昭和36年11月号。
- 九州鉄道管理局（1914）：『大正3年桜島噴火記事』（復刻）昭和55年西村書店。
- 震災予防調査会（1918）：『日本噴火志』（復刻）、昭和57年五月書房。
- 高橋鉄牛（1888）：『磐梯山破裂実見録』仙台書林。
- 東京大学新聞研究所（1988）：『災害と情報』研究班『1986年伊豆大島噴火における災害情度の伝達と住民の対応』。
- 廣井 脩（1985）：『災害の及ぼす社会的影響』。
- （1987）：『災害報道の社会心理』、中央経済社。
- 山田信夫（1988）：『磐梯山の噴火と長瀬川の泥流』、文化書房博文社。